

廃校になった校舎を 地域交流の拠点に

NPO法人報徳の会・内田未来楽校 事務局長（副理事長兼務） **小出 和茂**



1. はじめに

内田未来楽校は、市原市南部の市原市牛久から茂原方面に向かった内田地区（市原市宿174番地8）に建っています。校舎は、昭和3年（1928年）旧内田小学校の増築校舎として建築されました。しかし、内田小学校は昭和40年、同じ地域区の元内田中学校に移転し廃校され、民間に払い下げられて工場に利用されていましたが、昭和44年、火災により大正3年の校舎は焼失、残った増築校舎がその後も作業場として平成24年まで利用されてきました。



内田未来楽校周辺の航空写真（昭和36年）



現在の内田未来楽校

2. 活動のきっかけ

校舎は、平成24年末、転売・取壊されるのではという話が持ち上がりました。このことをきっかけに、内田小学校卒業生や地域の住民が中心となり、貴重な財産である木造校舎を買い取り、保存活用できないかと動き出しました。

はじめに、七名の発起人で組織の検討と団体設立の準備を進め、同時に所有者との売買交渉を行いました。売り出し価格（土地・建物）は、一千三百万円。私達にとって一千万円を超える物件を取得することは、とても高いハードルでした。そこで、所有者と交渉した結果、価格は九百万円にコストダウン、代金の支払は分割して返済することで合意し、5年以内に任意団体から法人化（NPO法人等）することも約束し校舎の取得と活用に向けた活動が始まりました。

3. 「報徳の会」立ち上げ

所有者との交渉成立後、本格的に組織の検討に入りました。検討は、会員募集、会費の額などを考え、組織名称についても議論しました。名称を考える上で、校舎敷地内にある「報徳井戸」が大きなヒントとなりました。

校舎が建っている内田地区では、昭和初期、二宮尊徳の「報徳の教え」（私利私欲に走るのではなく社会貢献すれば自らに還元されるという。）を当時の行政（村）、教育関係者が住民に広めていたという歴史がありました。そして、村の人々は、この教えを尊重し、地域の未来を託す子ども



「報徳会」に集う村人（昭和初期）



「報徳井戸」（横井戸）

達の教育のためにと、校舎建設や井戸掘りなど勤労奉仕により行ったそうです。住民自治の原点だったのではないのでしょうか。そうして完成した井戸は、「報徳井戸」と名付けられ子ども達の学校生活を支えてきました。

そこで、この先人達の中心にあった「報徳」を私達の行動指針とし、団体名称を「報徳の会」と名付け、平成25年5月設立総会を開催し、賛同者約40数名でスタートしました。

4. 「人」・「地域資源」を活かす

当初、私達は90年近い校舎の修復・活用する方法だけを考えていました。しかし、組織準備会の時、90歳を越える元教育者にお話し、昔の学校生活や実践していた「報徳会」についてお話をさせて頂きました。その際、高齢な方が教室に集まった人々を前に生き生きと話されている姿を見た時、この校舎に集まる人が生きることではじめて校舎は活きてくる、大事なことは校舎を活かすことではなく、「人」を活かすことと気付きました。



また、これまで痛んだ校舎を修繕してきましたが、その際には校舎を巣立ち社会に出て技術を身につけた人達が大いに活躍しました。修繕は、大工の棟梁となった人の技術、照明・音響設備の整備では電気工事士の資格を持った人の経験と技術が発揮されました。この人達の活躍を通して、会の活動を進めていく上では「人」を活かす取り組みが大切であると痛感しました。

現在、廃校校舎は全国的に多くあり、木造校舎ということだけでは人を呼び込めません。そこで、あらためて地域の魅力は何かを見直してみました。内田地区は、田んぼと山に囲まれ緑多い地域、ここに何があるのだろうか。初夏、水路や田んぼではホタルが舞い、川ではフナ釣り・ザリガニ釣りを楽しめ、小川ではメダカが元気に泳いでいる。里山には古道が走り、所々に石仏がある。田んぼの稲は、豊かな自然の中で育ち、他の所と比べてとても美味しい。それは、この地域に住んでいる私達からすると当たり前のように映り、その良さを感じていませんでした。ところが、地域の資源を利用したイベントでは、市内外から多くの方が訪れ、我が子に自然体験をさせたい、すばら



メダカの学校訪問



行燈祭り再現

しい自然・景観を楽しみたいなど私たちが感じていなかった感想が出てきました。

内田未来楽校は、地域資源である自然や歴史などを活用することで他の地域と差別化できるのではと考えました。そのため、自分達の足元をよく見ることに努め、地域伝統にも着目し、秋のお祭り「行灯祭り」を校舎で再現する取り組みも始めました。

このように、内田未来楽校は校舎の「保存・活用」という思いだけでスタートしたものが、現在は「人」・「地域資源」を活かした取り組みを通して校舎を活かしながら人と人のつながりを強める活動として発展してきました。

5. 「いちほらアート×ミックス」との関わり

市原市南部を中心に開催された「いちほらアート×ミックス」は、私達の活動に大きな影響を与えたと言えます。

初回の「いちほらアート×ミックス2014」は、小学校の統廃合などの課題が発生している市原市南部地域を活性化させるためスタートしました。内田未来楽校は、その会場の一つに選ばれました。会場となる上で、お客様への「おもてなし」の重要要素であるトイレは、第一番に解決する必要がありました。トイレは、千葉県(1/2)・市原市(1/4)の補助と会発起人の資金(1/4)で建設(男性1、女性2)し、芸術祭終了後もあらゆる活動で大きな効果を上げてい

ます。次に、「おもてなしコーナー」の設置でした。「おもてなしコーナー」は、地域住民が地域の産物や飲み物を提供する場として、昇降口を改造して設置しました。私達は、この芸術祭を通して千葉県・市原市との協力関係作り、「おもてなし」の意識向上と集客の企画力向上につながったものと考えています。

そして、大事なことは芸術祭時だけでなく、自分達の力で継続的に活動が続けることが大切であり、団体の信頼と支持を得ながら地域の魅力・活力に影響を与えていくことが必要と考えます。



トイレ整備



おもてなしコーナー



アート×ミックス2017

6. 支援者の信頼・支持を得るため

「報徳の会」は、大きな負債（土地代）をどのようにして返済していくのかということが役員・会員もなかなか言い出せないことでした。

そこで、活動4年目の総会では、平成30年度内に任意団体からNPO法人化し金融機関から融資を得ることを説明しました。また、返済は市の利子補給制度を活用することなど、具体的な内容とスケジュールを示しました。具体的な内容・数値を示すことは、会員、支持者から信頼・支持を得る上で重要なことと思います。（地域課題も具体的な数値を示すことが有効。）

このスケジュールにより、「報徳の会」は平成30年1月23日NPO法人となり、信頼・支持を得られるように組織強化を図りました。

また、校舎を維持・補修していく資金確保にも取り組みました。資金確保の手段として、クラウドファンディングに挑戦しましたが残念ながら目標ハードルを越えることが出来ず失敗に終わりました。その後、ちばのWA事業指定プログラムの採択を得て、90万円を超える寄付を頂きました。私達は、この寄付募集活動を通して、支援者から寄付を得るためには、寄付の先に何があるのか、活動のビジョンとミッションは何かを具体的に示して行くことの大切さを学びました。市民活動は、

多くの人から信頼・支持を得て継続的に取り組んでいく必要があります。そのためには、常に自団体の活動を見直していくことも大切であると考えます。

7. 未来に向けて

NPO法人報徳の会・内田未来楽校は、新たにNPO法人としてスタートを切りました。そこには、法人としての責任と期待があり、人材・資金確保、安定した活動など多くの課題もあります。また、地域では人口減少、耕作放棄地の拡大、有害獣被害など多くの課題もあります。私達は、これらの課題を解決することはできません。しかし、私達の活動で地域の人々や校舎に集まる人々に何か影響を与えて、人々が生き生きするならば未来が開けるのではないかと、そんな想いで未来楽校と名付けました。地域の未来は、今生きている私達が築かなければ迎えることはできないと考えます。そのため、私達に何が出来るかを常に考え、地域の未来に向けて活動を進めてまいります。

それぞれの地域には、まだまだ発見されていない地域の良さ・魅力があるはずです。その良さ・魅力をどう活かしていくかが地域づくりになるのではないのでしょうか。

